一人一冊

歴史は実験できるのか
自然実験が解き明かす人類史
ジャレド・ダイアモンド／ジェイムズ・A・ロビンソン 著
小坂恵理 訳
慶應義塾大学出版会（2018年６月） 2,800円＋税／320ページ

評者
津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

刺激的な「歴史書」

本書は単なる偉人の伝記や歴史的出来事の解説書ではない。著者が本書で試みているのは「因果推論」である。因果推論とは、ある出来事の原因が何であるのかを探ることを意味している。

出来事の原因を突き止めるなど、簡単なことだと思う読者は多いだろう。だが、出来事の原因に該当しそうな要因は同時に数多く存在する。また、原因にあたるものが観察できない事態もありうる。原因を突き止めることは容易ではないのだ。

科学の多くの分野において、因果推論に最も適した方法は「実験」だと考えられている。ランダムに選んだ複数のグループに対し、あるグループには特定の「処置」を与え、別のグループにはそのような「処置」を与えない。ここで、二つグループを比較すれば、その「処置」がなんらかの因果効果を持ったかどうかがわかるのである。本書が試みているのは、歴史の中に「実験に相当する例」を探し出し、因果推論に役立てようというものである。

本書の分析対象は、ポリネシア諸島の文化進化の多様性をもたらす要因、フロンティアにおける経済と移民のサイクルを作り出す原因、米国・メキシコ・ブラジルにおける中央銀行制度の設立を促した要因、群島の半分ずつが異なる国家によって支配された場合、それはどのような結果をもたらすのか、奴隷貿易がアフリカ諸国にどのような経済的影響をもたらしたのか、英国がインド各地に導入した地税徴収制度の違いは後世の政治的・経済的格差にどのようにつながるのか――など、多岐にわたる。

本書の中でも、「フランス革命の拡大と自然実験」（7章）は参考になる章である。フランス革命後、フランス軍が侵攻したドイツの地方ではフランスが改革を進めて封建的旧体制が破壊されたが、他方でフランス軍が来襲しなかったドイツの地域では旧体制が温存された。この場合、フランス軍による侵略と改革の有無が「処置」に該当するのだが、フランス軍が改革を進めた地域では顕著な都市化と経済的成長が見られたというのだ。つまり、フランス革命による封建制の打破は資本主義発展の契機となったと考えられる。ここからは、「制度改革こそ、経済成長を促す原因として何よりも重要である」という重要な考察が導かれる。

このように、本書は知的刺激に満ちた歴史書である。通俗的な読み物とは違ったかたちで「歴史の可能性」を感じたい読者に、ぜひとも一読をお薦めしたい。